

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

- 雑誌の歴史 ジャーナル・ビジネスのあれこれ (4) …1
- 2007年洋書輸入統計〔前編〕 ……………2
- 委員会報告〈文化厚生委員会〉 ……………5

洋書の歴史 ジャーナル・ビジネスのあれこれ (4)

尾内 昌弘

ドキュメントデリバリーからオンラインジャーナル
そして現在

Ulrich's Periodicals Directoryを調べると、最も古い二次資料誌は1845年に創刊されたPhysics Brief Physikalische Berichte (ドイツ) となっている。既に廃刊にはなっているが、1845年といえば江戸時代の末期、弘化2年(安政より2代前)である。また、化学の二次資料誌であるChemical Abstractsは創刊が1907年(明治40年)である。

20世紀後半になると学術論文が急増し、それに伴い二次資料誌も多数現れた。同時にオリジナル論文(原報)を求める研究者も増えた。1958年(昭和33年)にはISIからCurrent Contentsが創刊された。多くのジャーナルのTable of Contentsを集め、研究者がブラウジングをし、必要な論文を要求すれば原報を送ってくれた。1960年代の半ばになると、乾式複写機(ゼロックスなど)が現れ、それによるDocument Deliveryの需要が増え、British Libraryなどがその需要にんでいた。1971年(昭和46年)にはNLMがMEDLINEサービスを開始し、マイクロフィルムからの原報サービスも行われた。1972年(昭和47年)にはSDC社のORBITシステム、ロッキード社のDialogシステムがスタートし、続いてBRSが登場した。これらはいずれも米国の軍用ソフトの転用と言われており、コンピュータに収めた膨大なデータから検索した書誌情報をオンラインで提供するものであった。1980年代になりCD-Romが発明されると、それに記事全文を載せて提供するサービスの実験が始まった。1987年にElsevier, Blackwellなどの出版社が共同で始めた実験でADONISと呼ばれるものである。生物・医学関連誌215誌の全文をCD-Romに載せて図書館のコピーサービスに利用してもらい、それによって著作権のロイヤリティを得るというシステムで、1991年から本格的サービスが開始された。

1993年になると電子ジャーナル/オンラインジャーナルの研究が始まった。Springer社、AT&T Bell Lab.そしてCalifornia Univ. San Franciscoによって、Red Sage

Projectとよばれる研究プロジェクトが開始され、Bell Lab.によって開発されたRight Page システムによって分子生物学、放射線学の30誌にアクセスできるようになった。その後、ElsevierによるTULIP(The University Licensing Program)、ACSによるCORE System(Chemical Online Retrieval Experiment)などオンラインによるサービスの実験が行われた。

1990年代の後半になるとインターネットが急速に普及し、それに伴い、インターネット経由でのオンラインジャーナルが商業ベースで供給されるようになった。当初、多くの出版社は、印刷体のジャーナルの購読者は無料でオンラインジャーナルにアクセスできるという方法をとっていたが、オンラインジャーナルが普及するにつれ、価格体系は、印刷体のみ、印刷体+オンラインジャーナル、オンラインジャーナルのみ、といった形をとるようになり、更には利用者、研究者の数によるサイトライセンス契約という方式が近年では主流になってきている。

物流を伴わないオンラインジャーナルの普及は、顧客が出版社と直接に契約をする可能性を増やした。また、米国の政府機関であるNIHなどが、研究助成を受けた著者の論文を無料で配布するサービスを開始し、研究者は多くの学術論文、特に生物医学系のコンテンツを無料で読むことができるようになった。これらの問題は、われわれ取次ぎ業者にとって、かなりの痛手になってきているのが実情である。

あとがき

前書きにも書きましたが、思いつくまま書いたもので、トビックスの間に脈略もなく、また不正確な部分もあるかとも思います。もっと調べて、完全なものにすればよかったという反省も有りますが、お気づきの点があれば、ご指摘ください。

※この連載は今回で終了です。尾内様、ありがとうございました。なお本文はホームページ委員会のご協力で協会ホームページより転載いたしました。

2007年(平成19年)1月～12月の洋書輸入統計(前編)

荒 木 亮 一

財務省による「日本貿易統計」2007年12月速報から洋書関連商品の数値を品目別、国別、前年比などの一覧表にまとめた報告である。今後の経営方針や立案などの参考になれば幸いである。海外に出ると日本を客観的に眺めることができるというのが、現役を離れて9年、今はユーザーの目で見た洋書の動きを多少のコメントを付記して報告させていただくことにする。子供時代から父の蔵書である数千冊の原書に囲まれて育った頃の思いが甦ってきた。

(注：この統計の多くの数値は“価格”と表現されているが、CIF or C&Fの輸入通関額、即ち、“原価”であることをご記憶いただきたい。)

◎最近の話題といえば毎日のようにニュースを賑わせているアメリカのサブプライム問題や、原油価格高騰、そしてそれらを原因とする景気の落ち込みがある。環境面で地球温暖化問題は最重要課題のひとつであろう。中東のテロも“対岸の火災”ではないし、国内でも凶悪犯罪が起こり、気の休まる暇がない思いである。さて、出版界では電子化の急ピッチな侵入を如何捕らえるのだろうか？ アメリカでAmazonのe-book reader, "Kindle"が発進、いつ日本に上陸するのだろうか？ このシステムを利用するとAmazonから90,000点に上るe-bookの入手が可能になるということである。読者に愛された書店、印刷された書籍や雑誌類を木目細かいサービスで提供してきた書店、その書店を介在させない迂回路であることは容易に理解できる。Amazonのサービスにアプローチしてみたことがあるが、人間的な「心地良さ」がどんどんと失われてゆく侘びしさを感じた。

1. 主要品目の輸入通関額について

◎昨年の報告にもあるが、自動車のメーカーなどでベース・アップ交渉が始まる季節である。円高が100円を越えた。アメリカ経済の先行きが懸念され、今年に入ってドル安が進むなかで、年度末から新年度へ向けて洋書やジャーナルの価格はどうなるのだろうか？ 原書を読む講座が7周年を迎えた。今は読者の一人として洋書の値段を気にする立場になった。

(表1-a) 2006/2007年輸入通関統計(単位 百万円)

分類	品目	'06年1月～12月 輸入価格	'07年1月～12月 輸入価格	前年比	構成比
書籍 および それに 類する もの	単一シートのもの	173	307	177.5%	0.6%
	辞典および事典	154	128	83.1%	0.2%
	その他のもの(書籍)	30,787	29,580	96.1%	55.8%
	幼児用の絵本及び習字本	4,546	5,066	111.4%	9.5%
	小計(1)	35,660	35,081	98.4%	66.1%
	楽譜/地図/海図/地球儀	727	852	117.2%	1.6%
新聞・ 雑誌そ の他の 定期刊 行物		1,028	1,295	126.0%	2.4%
	小計(2)	1,775	2,147	122.3%	4.0%
	一週に4回以上 発行するもの	69	80	115.9%	0.2%
	雑誌その他の定期刊行物	16,190	15,744	97.2%	29.7%
	小計(3)	16,259	15,824	97.3%	29.8%
合計	(1) + (3)	51,919	50,905	98.0%	96.0%
合計	(1) + (2) + (3)	53,674	53,052	98.8%	100%

◎“書籍およびそれに類するもの”の輸入は、前年比で2006年が2.6%アップ、2007年は1.6%ダウンである。

「単一シート」はアップ・アンド・ダウンがある。前年比で2006年は48.7%ダウン、2007年は表の示すとおり77.5%アップである。20年以上前に、絵本のシート売買契約に携わったが、単発のビジネスであった。(注：数値的には2005年(337)、2006年(173)、そして2007年(307)で、ここにパーセンテージのマジックがあることをご注意いただきたい。)

「辞典類」の減少は大きい。その昔、英和辞典と和英辞典は中学生以上の学生にとって必需品であった。今や、ポケット・サイズの電子辞書が取って代わったようである。有数の辞書・事典類が収録された“gadget”で利便性が高い。広辞苑など権威ある辞書・辞典類に加えて、英和、和英、英英辞典が幾つも収録され、最近ではランダムハウスの入った機種もあるようで、語彙の検索のみならず、発音や旅行英会話の練習ができるなど多様性に富んでいる。前号までは“本”である辞書を推奨してきたが、本号ではこの“gadget”を現代の必需品であると認めざるを得ない気持ちになった。輸入額はこの3年で毎年20%～30%ほどの減少で、昨年は「驚くなかれ」10年前のほぼ1/3、という状況である。

「書籍類」はこの10年間で初めて300億円を割り込んだ(-0.014%)。原価の上昇を考慮すると、実際はかなり大きい減少率となる筈である。国別では、中国

が前年比で+41.3%、昨年は+14.1%と3年連続の増加を示した。日本と中国の、隣人同志らしい親密度と比例しているのであれば喜ばしいが。電子ブックは伝統的書店に対するチャレンジだと思う。

「絵本」は前年比で2006年に+11.5%、2007年も+11.4%である。中国からの輸入がダントツで39億円強、「絵本」のみの構成比では77.1%とトップである。因に、2005年が23億円、2006年30.5億円、増加の内容は？。

◎「雑誌・新聞」については、やはり学術的な情報の供給には電子ジャーナリズムが最適な媒体であるということであろう。電子ジャーナリズムが登場する以前、欧米諸国からのジャーナルは一日も早く入手するよう要求され、航空貨物として輸入するなどいろいろなサービスが考案された。一時期は、経費的に安い香港・シンガポール経由も行われたことについて、プラス・マイナスの事柄が鮮明に記憶に残っている。しかし、この数年の輸入額を遡ってみると、これからも紙媒体は必ず残って行くと確信できる。

◎「楽譜、地図・海図、地球儀」は、前年比で見ると2005年は+5%、2006年は+3%、2007年が+22.3%である。地球儀などは目的や趣味に合わせて使用できるようないろいろの種類が多く見られ、書店の品揃えなど、マーケットを安定して確保する努力が目に見えるようである。

(表1-b) 品目別輸入量 (総重量と総冊数)

品目	輸入された1Kg当たりの平均冊数					
(書籍)	'06 総冊数	'06 総重量 (Kg)	平均冊数 (Kg)	'07 総冊数	'07 総重量 (Kg)	平均冊数 (Kg)
単一シートのもの	～	255,950	～	～	184,358	～
辞典及び事典	161,645	118,896	1.4	124,964	87,065	1.4
書籍など	～	10,038,883	～	～	8,642,042	～
幼児用の絵本及び習字本	23,735,765	4,148,255	5.7	21,449,410	4,168,860	5.1
小計1(辞典+絵本)	23,897,410	4,267,151	5.6	21,574,374	4,255,925	5.1
(新聞・雑誌)						
一週に4回以上 発行するもの	516,738	39,908	12.9	519,937	42,038	12.4
新聞・雑誌その 他の定期刊行物	15,941,631	4,533,482	3.5	15,399,623	4,178,282	3.7
小計2	16,458,369	4,573,390	3.6	15,919,560	4,220,320	3.8
合計(1+2)	40,355,779	8,840,541	4.6	37,493,934	8,476,245	4.4

◎貿易統計には、輸入額と併せて冊数(NO)と重量(KG)が発表されるので、参考としてまとめた。

「単一シート」と「書籍類」の冊数は統計には記載されていない。

「辞典及び事典」は、冊数 v. 重量が2006年は1.34、2007年が1.44とほぼ同程度なので、輸入された商品の内容にあまり変わりがなかったと判断した。例えば、大きな百科事典がお見えした時などは、このバランスの変化で推測する、ということである。

「幼児用の絵本」の冊数 v. 重量の比率から、サイズ的に大きな商品の多かったと推測出来る(単価参照)。

「一週に4回以上発行するもの」および「新聞・雑誌」は、サイズ的には同程度であったと思われる。

(表1-c) 品目別輸入量 (総冊数と平均単価)

品目	輸入された「総冊数と平均単価」					
(書籍)	'06 総冊数	'07 総冊数	前年比	'06 年 平均単価	'07 年 平均単価	前年比
単一シートのもの	～	～	～	～	～	～
辞典および事典	161,645	124,964	77%	¥953	¥1,024	108%
書籍など	～	～	～	～	～	～
幼児用の絵本及び習字本	23,735,765	21,449,410	90%	¥192	¥236	123%
小計	23,897,410	21,574,374	90%	¥197	¥218	111%
(新聞・雑誌)						
一週に4回以上 発行するもの	516,738	519,937	101%	¥134	¥154	115%
新聞・雑誌その 他の定期刊行物	15,941,631	15,399,623	97%	¥1,016	¥1,022	101%
小計	16,458,369	15,919,560	97%	¥988	¥994	101%
合計	40,355,779	37,493,934	93%	¥519	¥559	108%

註:「単一シート」、「書籍」は冊数の統計が発表されていない。

◎輸入冊数の前年比と、輸入額を輸入冊数で除した「平均単価」一覧表である。

「辞典及び事典」の冊数が減少、平均単価は多少上がっているが、輸入額も減少しているので、前年から見てほぼ同じようなタイプの辞書類が扱われたように思われる。

「幼児用絵本」は、2001年以来安定していた平均単価が2005年に約24%の急落した。徐々に回復して2007年の数値は2004年(235)のレベルに戻した。平均単価をデータに加えた2001年以来の最高値は2002年の(269)である。2005年の平均単価の急落は、中国からの輸入が急増(約30%)したことに起因すると推論した。翌2006年は更に約32%増であったが、2007年の数値を見ると、中国の経済発展による原価の上昇があったのかも知れない。

(新聞・雑誌)は変動の小さい1年であったようである。「一週に4回以上発行するもの」の平均価格は15%の上昇であるが、絶対値が少ないので、全体としては1%の変動であった。

2. 最近10年間の輸入額一覧

(表2-a) 10年間の輸入通関額の推移 (単位 百万円)

品目	書籍・辞書・絵本			雑誌・新聞その他の 定期刊行物			合計		
	輸入額	前年比	指数	輸入額	前年比	指数	輸入額	前年比	指数
1998	35,253	99%	100	19,056	105%	100	54,309	101%	100
1999	35,151	100%	100	18,029	95%	95	53,180	98%	98
2000	33,190	94%	94	16,542	92%	87	49,732	94%	92
2001	39,244	118%	111	19,125	116%	100	58,369	117%	107
2002	41,243	105%	117	15,892	83%	83	57,135	98%	105
2003	40,585	98%	115	16,756	105%	88	57,341	100%	106
2004	37,086	91%	105	14,575	87%	76	51,661	90%	95
2005	34,767	94%	99	15,353	105%	81	50,120	97%	92
2006	35,660	103%	101	16,259	106%	85	51,919	104%	96
2007	35,080	98%	100	15,824	97%	83	50,904	98%	94

◎書籍類、雑誌・新聞類の輸入額を10年遡って、1998年を100（指数）として見ている。2007年もマーケットに変わりはないようである。実行関税率表にいう「印刷した書籍、小冊子、リーフレットその他これらに類する印刷物（単一シートのものであるかないかを問わない）」のシェアが「紙」製品から「電子」製品へ移って行く時代なのだ。

(表2-b) 10年間の品目別推移 (単位 百万円)

品目	単一シート		辞典		書籍		絵本	
	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比
1998	122	101%	345	63%	32,603	102%	2,183	75%
1999	121	99%	341	99%	28,302	87%	2,387	109%
2000	116	96%	225	66%	30,282	107%	2,567	108%
2001	271	234%	283	126%	36,255	120%	2,435	95%
2002	132	49%	333	118%	37,636	104%	3,142	129%
2003	212	161%	292	88%	36,673	97%	3,401	108%
2004	284	134%	316	95%	32,730	89%	3,756	110%
2005	337	119%	241	76%	30,111	92%	4,078	109%
2006	173	51%	154	64%	30,787	102%	4,546	111%
2007	307	177%	128	83%	29,580	96%	5,066	111%

◎「単一シート」の2007年を国別に見ると、やはりアメリカがトップで37.8%（115.7）、2位中国で19.7%（60.5）、3位がドイツで10.7%（32.8）、イタリア7.5%、フランス5.3%とつづく。品目の詳細については、発表された統計に含まれていないので、輸入元および輸入額からの推測に過ぎないが、幼児用絵本とアート・ブックが考えられる。

「辞典」類の減少は著しい。やはり、マーケットが「紙」から「電子」へ移動したことは明らかである。利便性よりも、ページを開くと一目でスキャンできる情報量や、それらを読んで楽しむべき（辞書は読むもの）、と言い続けてきたが、現代は電子辞書の時代であることを認めざるを得ないようだ。

「書籍」類も、特に専門書や教科書が複写機などによる影響を受け始めてからかなりの時間が経ったが、

輸入量は横ばい、マーケットは底辺近くで安定とも言えそう。一方において“Kindle”の日本への導入はまた新しい影響を及ぼすのだろうか、と気になる昨今であるが、これを如何に利用し、利益に結び付けることができるかは大きなチャレンジになるだろうと思う。

「幼児用の絵本」は10年前の2.3倍に増加している。2006年、2007年の2年連続でそれぞれ11%の伸びである。国別のシェアは、中国が77.1%とダントツ（2006年は67.2%）、つづいて香港6.0%、アメリカ5.1%、タイ4.3%、英国1.7%、とつづいている。

(表2-b続き) 10年間の品目別推移 (単位 百万円)

品目	雑誌・新聞		楽譜・地図		合計	
	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比
1998	19,056	105%	1,523	178%	55,832	102%
1999	18,029	95%	1,277	84%	50,457	90%
2000	16,542	92%	1,153	90%	50,885	101%
2001	19,125	116%	1,451	126%	59,820	118%
2002	15,892	83%	1,414	97%	58,549	98%
2003	16,756	105%	1,575	111%	58,909	101%
2004	14,575	87%	1,621	103%	53,282	90%
2005	15,353	105%	1,706	105%	51,826	97%
2006	16,259	106%	1,755	103%	53,674	104%
2007	15,824	97%	2,147	122%	53,052	99%

◎「雑誌・新聞」のマーケットについては、輸入統計には報告されない形の電子ジャーナルのシェアは不明だが、これを考えあわせると単純に外国雑誌のマーケットは減少した、とは言えないのではないだろうか。印刷されたものの大きな伸びを期待することはできないであろうが、しかし、これも新しい時代への経営的チャレンジに違いない。

「楽譜」と「地図・地球儀」は、絶対額は小さいがこの10年来安定している。特に2007年は前年比+22%の増加である。「楽譜」輸入額の国別構成比は、流石にドイツが一位で42%、つづいてアメリカの34%である。次に「地球儀・天体儀」は、中国から32%弱、台湾から29%強、インドネシアから26%強、次点イタリアが7%、と東南アジアからが多い。「地図」類は、製本したものは全体の7%に過ぎないが、その約32%が英国から、29%がアメリカである。その他のものには壁掛けタイプなどが含まれると思うが、82%が英国からの輸入である。8%のアメリカが次点、5%がオーストラリアから、シンガポールは2%であった。新しいタイプの商品も見かけられるので、まだまだ将来性がありそう。

3. 主要10ヶ国からの2007年輸入通関額

(表3-a) 主要10ヶ国からの2007年輸入通関額 (単位 百万円)

品目	書籍・辞書・絵本			雑誌・新聞その他の 定期刊行物			計		
国名	輸入額	前年比	構成比	輸入額	前年比	構成比	輸入額	前年比	構成比
米	11,938	99%	34%	6,660	94%	42%	18,598	97%	37%
英	7,874	95%	22%	4,577	95%	29%	12,451	95%	24%
中国	7,121	135%	20%	140	109%	1%	7,261	134%	14%
独	2,016	100%	6%	754	86%	5%	2,770	95%	5%
オランダ	204	104%	1%	1,757	132%	11%	1,961	128%	4%
仏	1,277	116%	4%	264	98%	2%	1,541	113%	3%
シンガポール	944	94%	3%	487	99%	3%	1,431	96%	3%
香港	1,193	43%	3%	100	106%	1%	1,293	45%	3%
韓国	400	38%	1%	272	93%	2%	672	50%	1%
イタリア	398	130%	1%	251	120%	2%	649	126%	1%
小計	33,365	98%	95%	15,262	98%	96%	48,627	98%	96%
その他 の国	1,715	112%	5%	592	99%	4%	2,227	106%	4%
計	35,080	98%	100%	15,824	97%	100%	50,904	98%	100%

◎「書籍」と「雑誌」の合計額で見ると主要10ヶ国は昨年と同じ国々が顔を揃えた。順位には交代があり、ドイツ5位→4位、オランダ9位→5位、フランス8位→6位とそれぞれ順位を上げ（輸入増加）、香港4位→8位、韓国6位→9位となった。品目的に変動を見ると、ドイツは「単一シート」が前年の約11倍と大幅に増加、オランダも「雑誌」約30%増加と前年

度“0”であった「単一シート」の輸入もあり、フランスは「単一」2.4倍や「辞典」約5倍、「書籍」15%増、などがある。

(表3-b) 主要輸入元別輸入対照表 (単位 1,000百万円)

品名/国名	米	英	EURO圏	東アジア	東南アジア	その他の国	合計
書籍類	11.9	7.9	4.1	8.9	1.6	0.7	35.1
雑誌類	6.7	4.6	3.1	0.5	0.5	0.4	15.8
合計	18.6	12.5	7.2	9.4	2.1	1.1	50.9
前年比	97%	95%	109%	96%	100%	92%	98%
07構成比	37%	25%	14%	18%	4%	2%	100%
06実績	19.1	13.1	6.6	9.8	2.1	1.2	51.9
06構成比	37%	25%	13%	19%	4%	2%	100%

注1：“EURO圏”は参加国12カ国の合計。

注2：“東アジア”は中国、香港、台湾、韓国4カ国の合計。（北朝鮮は0）

注3：“東南アジア”はシンガポール、タイ、マレーシア、インドなど10ヶ国の合計。

◎輸入額をベースに、国／地域別にまとめた一覧表である。国／地域を構成比で見てもよい。前年と比較して米・英は実際の輸入額は若干のマイナスであるが構成比は変わらず。変化が見られるのはEURO圏の1%上昇、東アジアの1%下降である。東アジアには昨年北朝鮮から輸入、「書籍」2百万強、があったので5ヶ国であったが、2007年は北朝鮮が“0”とのことで、4ヶ国のみである。（後編につづく）

委員会報告 <文化厚生委員会>

第128回 72会ゴルフコンペ

2008年3月8日（土）快晴

会 場：龍ヶ崎カントリー倶楽部（茨城県）

参加者：23名（18社）競技：18ホール

ストロークプレー（新ペリア方式による）

〔成績表〕

	氏 名	(所属)	グロス	ハンデ	ネット
優勝	中村 和之	(阪神エアカーゴ)	89	16.8	72.2
2	金原 優	(医学書院)	93	20.4	72.6
3	石渡 昇	(阪神エアカーゴ)	93	20.4	72.6
4	山川 隆司	(ユサコ)	92	18	74
5	鶴 竜次	(東亜ブック)	92	18	74
6	楠本 忍	(東京ブックランド)	99	24	75
7	斎田 利幸	(三善)	96	20.4	75.6
ベストグロス	中村 和之	(阪神エアカーゴ)	89	(OUT 44 IN 45)	
ドラコン	綾森 豊彦	(日本出版貿易)	・中村 和之		
	(阪神エアカーゴ) × 2	・真庭 雅一	(エルゼビア・ジャパン)		
ニヤピン	横溝 浩幸	(トップントラベルサービス)	・西山 久吉		
	(西山洋書)	・真庭 雅一	(エルゼビア・ジャパン)		
	鶴 三郎	(東亜ブック)			

第2回ボウリング大会

2008年3月13日（木）

会 場：東京ドームボウリングセンター

参加者：20名（9社）

競 技：2Gのトータルピン（女性は20ピン/ゲームのハンディキャップあり）

〔成績表〕

順位	氏名	会社名	総得点	1G	2G
優 勝	マーク・グレシャム	U P S	337	146	191
準優勝	高橋 直樹	東京ブックランド	329	185	144
3 位	西山 麻弥	西山洋書	300	124	136
4 位	西山 幸児	西山洋書	298	139	159
5 位	佐藤 俊介	阪神エアカーゴ	295	136	159
6 位	平野 寛	日新	295	133	152
7 位	木村 知志	大洋交易	284	150	134
ハイスコア男性/G	マーク・グレシャム	(U P S)			191
ハイスコア女性/G	西山 麻弥	(西山洋書)			136

※ゴルフ、ボウリングの写真は協会ホームページ、お知らせ欄にございます。ご覧ください。

日本総代理店：丸善

経済学の最重要レファレンスが約20年ぶりに全面改訂！
編集委員会には伊藤隆敏教授（東京大学）も参加

ザ・ニュー・パルグレイヴ経済学大辞典 第2版 全8巻

The New Palgrave Dictionary of Economics 2nd edition

Ed. by **Steven N. Durlauf**, *Kenneth J. Arrow Professor of Economics
at the University of Wisconsin at Madison, USA, and*
Lawrence E. Blume, *Professor of Economics at Cornell University, USA*

2008年5月刊行予定。8 Vols. 7,680 p., Hard.

(ISBN: 978-0-333-78676-5 / 注文番号MBN: 0709139)

予約価（2008年5月15日受付分まで）

USD2,500.00 / 通常価 ¥426,195 / 特価 ¥397,782 [税込]

（上記以降）USD2,950.00 / 通常価 ¥502,911 / 特価 ¥469,383 [税込]

本書は、経済学の最重要レファレンスであるThe New Palgrave Dictionary of Economics（初版1987年刊行）の第2版です。旧版に収録されていた古典的重要論文の多くを保持するとともに、1000以上の新規の項目を収録し、また初版に収録された項目も全面的に改訂された論文を収録しています。1500人以上の著名な寄稿者による本書は、1750もの論文を収録し、収録語数は580万語にも達します。経済学に関係するあらゆる人に、まさに必須のレファレンスといえます。



【本書の特色】

- ・ ノーベル賞受賞者を含む各分野の権威が寄稿
- ・ 収録項目の70%以上が新規のものか旧版を改訂したもの
- ・ 行動経済学や実験経済学など新規分野も分析
- ・ 現状の分析とともに歴史的観点から将来の動向を議論

【オンライン版の特色】

- ・ リモートアクセス可能
- ・ フルサーチ・ブラウジング機能付き
- ・ 各論文にはクロスレファレンス用のハイパーリンク付き
- ・ 関連webサイト・情報ソースへのリンク付き、オンラインのテキストソースも収録

* オンライン版の詳細はお問い合わせ下さい。

Contents:

- ◆ Publishing History
- ◆ Editors' Preface
- ◆ List of Entries A-Z
- ◆ The Dictionary Volumes 1-8

- ◆ Appendices
- ◆ Subject Index
- ◆ Index

(Palgrave Macmillan, GBR / 日本総代理店：丸善)



ESTABLISHED IN 1869

【教育・学術事業本部】 〒103-8244 東京都中央区日本橋3-9-2 第二丸善ビル

☎ (03) 3272-3851 <http://www.maruzen.co.jp/home/irn> 振替：00170-5-5

支店・営業部・営業所・出張所＝横浜・千葉・八王子・大宮・筑波／札幌・盛岡・仙台・名古屋・岐阜・金沢
京都・大阪・神戸・岡山・松山・広島・福岡・長崎・熊本・沖縄／ニュージャージー・ロンドン